

## (株)新田農園 代表取締役社長

# 新田尚志さん

## 明日へ向かって駆ける

### 農業法人の経営者は語る

「めまぐるしく変わる情勢に対し、よりスピーディーで的確な経営判断を行うため、また、従業員を雇用していくためには法人化が必要だった」と話すのは、京丹波町蒲生地区の農業生産法人「株式会社 新田農園」の代表取締役社長、新田尚志さん(48)だ。

新田さんは黒大豆エダマメを中心に、京野菜の大規模栽培に取り組む。同地区は、国道9号線と27号線の交わり、古くから交通の要衝として栄えてきた。「丹波黒大豆」の産地として有名で、農業も盛んな地域だ。

新田さんは、京都府立農業大学校を卒業後、家族で「大かぶ」2畝や水稻、杉など山林用種苗を栽

# 規模拡大これからも



▶ 定植した「京夏ずきん」の畑を背に黒大豆の大規模栽培に取り組む新田さん

培していた。「大かぶ」は、重量野菜で手間も掛かり、労働力の確保が難しいことから、普及センターの勧めもあって地元の特産物「丹波黒大豆」や黒大豆エダマメ「紫ずきん」に切り替えた。当初50㍗で始めた栽培は現在、8月から出荷する「京夏ずきん」と9月以降に出荷する「紫ずきん」の黒大豆エダマメを合わせ20畝まで拡大。府内でもいち早くエダマメ用の脱莢(だつきょう)機、袋詰め用機械を導入し、機械による栽培面積の拡大に取り組んできた。

新田さんは「栽培面積を増やせば人を雇い、新しい農業機械や、パイプハウスも必要になる。JAや府に相談し、2015年に法人化を決めた」と経緯を語る。同地域では高齢化が進み、年々預かる農地も増えた。同法人の同黒大豆エダマメは現在、JA京都管内における生産量の20%超を占める。府内でも最大規模の生産者として、代表的な存在だ。また、京の伝統野菜「堀川ごぼう」や山林用種苗も栽培する。

規模を拡大する一方で「従業員やアルバイトなどの人集めと、冬場にどう収入を増やすかが課題だ。募集してもなかなか人が集まらない。また、人を雇うとなれば、年間を通じて安定した収入を得る必要がある。そのためには、わが社のことをより知ってもらう

らうための情報発信、府の補助事業などを活用した新たな取組が必要だ。JAとも一層、連携を強めていきたい」と新田さんは話す。

府産の農産物は人気があるため、新たな作物にも挑戦したいと新田さんは考えている。また、同社で新たに導入したエダマメ用色彩選別機を有効に使えるよう、周辺農家からのエダマメ選別作業を受託することも検討中だ。地域全体で黒大豆エダマメの品質をさらに向上させてブランド価値を高め、消費者においていい農産物を提供していくことが目標だ。

■法人所在地 船井郡京丹波町蒲生南垣内27。(電)0771(82)0214。

■法人概要 2015年2月3日設立。役員2人、従業員3人、アルバイト1人、農繁期にパートタイマー20人。経営面積25畝(黒大豆枝豆20畝、堀川ごぼう1畝、山林用種苗1畝、水稻80㍗)、パイプハウス6棟。農機 トラクター7台、薬剤散布機2台、乗用管理機・田植え機・コンバイン各1台、エダマメ用脱莢・色彩選別・袋詰機一式